

HKFA Technical Report

2017 北海道中学校サッカー大会 ～世界基準を見据えた北海道サッカーへ～

開催日時

2017年7月28日(金)～30日(日)
7/28 1回戦2試合(4チーム)・2回戦
7/29 3回戦
7/30 準決勝・決勝
試合時間 60分 (30-10-30)

会場

旭川市東光スポーツ公園球技場
旭川市忠和公園多目的広場

報告者

HKFA技術委員会U-14担当(道北)
柴田 晃宏

TSGメンバー

HKFA技術委員会U-14部会

寺島 徹(道東) / 伊藤 佳史(道南)
菊池 豪(道東) / 田澤 壽樹(道南)

47FA各ブロックユースダイレクター

旭川地区サッカー協会3種委員会



1 レギュレーション

暑熱対策として気温30℃を超え、WBGT(暑さ指数)25℃以上にもなり、クーリングブレイクや飲水タイムを適応とした。

大会は18チームのトーナメント戦で、昨年度までは2日目、3日目は勝ち上がれば1日2試合あり、2日目18時に終了し翌日10時にゲームが行われるチームにとっては、24時間で4ゲーム(240～延長の場合には280分)を戦う過酷な日程もあった。そのため、今年度は選手の安全を重視したレギュレーションを考え、1日目に1～2回戦を行って2日目を1試合としたことで、1回戦小山や決勝戦など2試合あった時を除いては、運動量が極端に下がってパフォーマンスが悪くなったり、熱中症の症状や足が痛くなってプレー続行不可能になる選手が少なかった。結果として、ゲームの質の向上につながったと考えられる。今年度は、4ピッチを用意した旭川の関係者の協力によって実現した。次年度以降も引き続き、今年度同様に実施できるようお願いしたい。

課題としては、大会1日目について2回戦が終わると18時を過ぎていたことを考えると、開会式の日程をつめて1回戦の開始時間を早めることや最終日の準決勝・決勝が1日120分を越えて実施されている部分について選手の安全面から検討を要する。

今後とも選手の健康・安全の面から関係各方面で話し合いを行い、改善していきたい。

2 ウェルフェアオフィサーの設置について

一昨年度の全道・全国中体連以降継続し、今年度も中体連専門委員会の協力を得て、ウェルフェアオフィサーを可能な限り配置しナショナルトレセンコーチやユースダイレクターが担当した。継続することで、大会全般を通して、指導者の選手へのよりポジティブな声かけや判断を促すコーチングや関わりが多くなるとともに、選手たち自身が観て判断をしてプレーするゲーム環境となっていた。次の段階としては、選手たちが自分たちで状況を判断し、ピッチ内でゲームの流れを感じ取り、変えていける力が育つことに期待したい。

世界基準を日常に

日本のトップレベルを目指す北海道

5ブロックでの一貫指導体制の構築

また、そのためには、指導者が選手のプレーの判断に直接働きかけるのではなく、良い判断を促すガイド・ディスカバー役に徹することが大切である。また、レフェリーの判定に対するクレームも少なかった。ウェルフェアオフィサー設置の目的やその意味について、大会運営者より試合前・ハーフタイム中に会場内の観戦者や保護者に伝え、そのうえでの競技運営や観戦マナーについての協力を促していたことも素晴らしい取り組みであった。

3 分析データ ①ポゼッション

ボールポゼッションの回数(4本以上連続してパスがつながった回数)について、今年度は大会平均で1試合当たり11.4回であった。ここ3年間の大会平均値と大きくは変わらなかった。

北海道サッカー協会としては、『ユース育成コンセプト2015』にもあるように、「4本以上のパスの成功が質の高い攻防の中で1チーム当たり10分間に5回以上あること」を現在の目安と考えている。これは意図的なパスの成功が攻撃の目的ということではもちろんない。質の高いゲームが展開される試合では、主導権を握っているチームには結果としてこのようなデータが得られているということである。

昨年度優勝、今年度は準優勝となった、北斗上磯中においては4本以上のパスの成功が、今年度は決勝で11回と倍増するとともに、厳しい環境の中でもやみくもにボールを蹴り合うのではなく、意図のあるプレーにからの攻撃に挑戦していた。

中体連では、奪ったボールを判断を伴っているかいないかにかも含めて、早く前方にという速攻型のチームが多い中でも、GKからビルドアップをしながらボールをしっかりと保持しつつ相手のプレッシャーをかわしながらゴールへ向かって前進するチームが増えた。特に、上位に進出したチームはボールを失わずにビルドアップ、ポゼッションをしながら攻撃を組み立て、相手の状況を判断してゴールに迫る場面を作っていた。

しかしながら、プレッシャーが強くなると思うようにパスをつなげて展開することはあまりできていなかった。日常のトレーニングやリーグ戦を通じて、世界基準を意識した日常の取組が重要となる。それを可能にするには、両足ともに自由にボールを扱える力やヘディングのスキルを上げることがこの年代の選手の一の課題と感ずる。

選手個々でみると、スピードに乗ったドリブル、1対1の守備、キックやヘディングの正確性など基本技術のしっかりとしてなおかつスタミナのある選手がいることが勝利のカギとなっていた。しかし、相手のプレッシャーによって、判断なく蹴ってしまう選手が多かった。相手のプレッシャーの中でも意図的にボールを前に運ぶためには、前もって周りの状況を観ておいて判断してプレーすることが求められる。周りが観えている選手はファーストタッチが良く、ボールの置き所が良いことで常に攻撃の優先順位を意識してプレーをすることができる。

前線からのハイプレッシャーの守備に対しても、状況を見て判断し、ボールを失わずにチームで攻撃を組み立てられるようなゲームを期待したい。

4 分析データ ②スローイン

スローイン後2本以上パスがつながった、ある程度キープできたものを成功とみなすが、昨年度は80分のクラブユースの決勝でスローインが67回、60分の中体連の決勝で59回と回数も非常に多かった。今年度の決勝では、回数が28回に激減している。その要因は、両チームともにボールポゼッションをしてボールを大事にしながらゲームを組み立てようとしたことや、ボールを奪うときに安易にタッチラインに逃げずに体を入れてキープし、再度ビルドアップしようとしていたことが考えられる。

「スローインの成功本数が失敗本数より多い」を目標にしているが、過去の決勝ではいずれも失敗回数の方が多し。日頃から各チームでも取り組む必要性を感じた。

5 分析データ ③シュート

今大会の特徴として、上位に進出したチームは相手の状況を見て、突破を図るドリブルからのクロスや、DF背後へ通すスルーパスからフィニッシュへ持ち込む場面が数多く見られた。

1試合を通じての目標としては、5分に1本のシュートが望ましいと昨年度のTSG報告でも述べているが、3回戦・準決勝に限っては今年度は過去3年で1番本数が多い結果となった。(15' 66本/16' 116本/17' 130本)しかし、得点シーンの多くは、相手のボールを奪ってからのカウンターであったり、相手の守備のミスをついたものが多かった。常にゴールを目指す意識は必要であり、狙い続けることは大切だが、それができないときには、やみくもにゴール前に蹴り込むのではなく、ポゼッションから相手守備陣を崩していくことが重要である。

決定力の向上は、北海道だけではなく、日本全体の課題となっている。「日常を本気で変える」という意識で我々指導者が日常のトレーニングから得点を取ることへの強く持たせることが重要である。



6 分析データ ④インプレータイム

60分のうち、実際にプレーしているインプレータイムは3回戦以降で、1試合平均36分という数値であった。中には前後半でスローインが47回というゲームもあり、これは安易にタッチラインにボールを出し、スローインの回数が多くなっていることにも比例している。北海道全体のサッカーの質の向上を考えると、前方へ大きく蹴るだけのサッカーではなく、選手が状況を判断してビルドアップやボゼッションして攻撃していく技術を高めるために、日常のトレーニングから指導者が取り組んでいかなければならないと感じる。

7 GK（ゴールキーパー）

今大会のGKは、各チームともシュートストップの技術が向上し、キャッチミスやファンブルから失点する場面は少なくなっていた。特に、上位に進出したチームのGKの多くは、シュートストップ技術とポジショニングに優れ、決定的な場面でも落ち着いてゴールを守り失点を防いでいた。また、北斗上磯中GKはキックの精度が高く、リスタートからのミドルキックで味方のサイドハーフの選手の足元に正確にパスをつなぎ、すばやい攻撃の第1歩として機能していた。

課題としては、ビルドアップできる場面でも前方に大きく蹴り出してしまったり、クロスやコーナーキック・セットプレー時に適切なポジショニングが取れていなかったり、守備時の味方へのコーチング・連携不足（ラインコントロール等）から失点につながっている場面が見られた。

育成年代では、各チームで工夫をしながらトレーニングをしているが、今後は、FPの一員としてビルドアップに積極的に関わっていけるよう、FPのトレーニングとの関わりの中でGK技術の向上にも目を向けていく必要がある。

8 トピックス

決勝戦は攻守に見応えのある好ゲームとなった。北斗上磯中は体力がベースにあってフィジカルが強く、スペースを見つければドリブルで突破を図り、球際やヘディングの競り合いでも負けることが少なかった。また、優勝した稚内南中はボールを失わずに攻撃を組み立てることができ、個々の選手の基本技術の高さに加えて、スピードに乗ったドリブルからのフィニッシュ、守備での1対1の対応の強さやGKのシュートストップの技術の高さなどが特に際立っていた。

また、プレーではないが、決勝戦の後半に稚内南中の選手が足をつってしまい、ピッチに横たわってベンチの動きを待っていた際に、北斗上磯中の主将がピッチ脇に置いてある給水用のボトルを取りに行き、相手選手のために手渡す様子が見られた。やはり、サッカー選手である前に一人の人として行動したこのフェアプレーの精神に心から拍手を送りたい。

9 まとめ

今年度の中体連全道大会は、旭川地区サッカー協会や地元の教職員をはじめ多くの方々の協力によって運営された。また、専門委員をはじめ、今大会運営をしていただいた当番校の方々の協力やウェルフェアオフィサーの配置などを通して、指導者の選手への関わりが良くなった。今大会にご協力いただいた、旭川地区サッカー協会の指導者、当番校の方々には心より感謝申し上げます。

勝ち上がったチームの特徴として、試合を通じて走りきれぬスタミナがベースにあり、個々の基本技術がしっかりしていて、攻撃ではチャンスがあると見るやスピードに乗ったドリブルで積極的に仕掛けることができる選手がいたり、幅と厚みのある攻撃を意識して取り組めるチームが多かった。守備では、良いポジションから積極的にインターセプトを狙い、くさびのパスが入っても相手を簡単に振り向かせない、ボール保持者に対してチャレンジ&カバーができていたチームが多かった。これらは、サッカーの原理原則の部分であり、その指導の重要性を改めて感じた大会となった。

指導者の関わりでは、ガイド・ディスカバリーに基づいた選手へのポジティブな働きかけが多くなった。褒めるなどプレーを適切に評価することで、選手に判断の基準を与え、思考・判断を止めないコーチングを行う指導者が多くなった。また、試合での審判への異議もみられなく、選手も指導者もおおむねジャッジを尊重し、少しのコンタクトで選手が倒れても、指導者やベンチの選手から「すぐに立ってプレーしろ」との働きかけも見られた。

今後も審判だけでなく、タフでたくましい選手を育成するために指導者や選手も一体となって取り組んでいきたい。

中体連における北海道技術委員会のTSG（テクニカル・スタディグループ）によるゲーム分析は、一昨年度の全道大会から始め、今年度も旭川地区サッカー協会の指導者の協力を得て実施することができた。目的は、各チームのゲーム分析をし、今後の北海道の中体連大会に活用していくこと、そして、地区サッカー協会の指導者の方々にもご協力いただき、データの取り方やゲーム分析のノウハウを各地区へ発信していくことである。

TSGについての質問や、自チームのデータを知りたい方などは遠慮なく各ユースダイレクターや担当者へお問い合わせ下さい。

